

東京女子大学理事長 原田明夫様
学長 湊 晶子様

**東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会の会員一同は、
東京女子大学東寮の破壊に強く抗議いたします。**

私たちは2007年夏の終わりの衝撃的な出来事を、生涯忘れることはできないでしょう。東寮は徹底的に破壊されました。おぞましい轟音とともに、重機の先のパワーショベルが白いレトロな美しい壁面に鋭く喰い込む様子は、まさに「破壊」でなくて何でありましょう。晩夏の青空の下でホースの激しい散水を浴び、ゆがんだ鉄の棒鋼がつづるコンクリートの断片となってゆくいたましい姿を、その場で目撃した会員有志らは、ただ息をのんで佇むばかりでした。大学執行部の方々のうち何人が、この無残な光景をご覧になりましたか。そしてどんなご感想をもたれましたか。あえてお伺いしたい。

今回のキャンパス整備計画の事業に関して、私たちは当初から一貫して「解体」という言葉のみを使ってまいりました。まとまったものを分解し、機能を失わせることという本来の意味で、この事実をとらえようとし、保存と機能の変更に向けて、ぜひ計画を変えていただきたいとひたすら願っていたからです。が、一顧だにされず、現実の光景は解体ではなく、まさに「たたき壊す」という、思わず目をそむけたくないような、暴力的な破壊行為でした。

ともあれ現実に建物も樹木も永遠に消されてしまいました。自立を支え象徴した焦げ茶色の個室ドアが剥ぎ取られ、何十枚も重ねて放置されている光景に、そこにこめられた創立者の意図がすげなく打ち捨てられたかのような虚しさを感じました。あの一枚のドアこそが、学生に個の確立を促し、内省と祈りへ誘ったのでした。

今回の交渉は、もとより利害抜きに純粋な愛校心から始まったものであり、決して対立をするためではなく、合意で納得のいく結論を得るためのもの、ということは面談の最初に申し上げた通りです。すべての面談記録は保存してあります。また三号館の改築こそ優先すべき課題であり、それへのご検討をと初期の段階から申し上げ、検討するとお約束いただきました。しかし回答は抽象的で簡単な文言のみで、建築的・具体的裏づけのあるものではありませんでした。

その後今年になって、当会から論点を整理し、まとめて提出した公開質問状に対する回答もなく、あまつさえ6月以降と言われていた工事の日程等まで秘匿されました。昨今、どの分野でも情報公開が常識となりつつあるのに、説明責任が果たされて

いないことを、執行部はどうお考えなのでしょうか。現地に囲いが張り巡らされた後、その隙間にはカメラのレンズを意識してか、白いガムテープが貼られるなど、非常識なまでの警戒ぶりだったと会員が伝えています。信頼に基づくはずの大学と同窓生との関係が、かくまで敵対的であっていいのかと驚くのみでした。

また計画は公表の最初期から総合的になされたとは言いながら、『学報（2006年7-8月合併号）』で残ると表示され、シンボルとして残すとも言われていた塔も、いつのまにか全面的な破壊へと至りました。多くの同窓生が「塔を残してアーカイブスに」と手紙や電話で最高責任者である原田理事長および、同窓生初の学長であられる湊学長に直訴したにもかかわらず、実質的に問答無用の態度をとられたことは、大学にあるまじき不寛容だと言わざるを得ません。

今回の件でキリスト教精神に基づくわが東京女子大学で、これまでに味わったことのない疎外感と深い失望を与えられたことを、会員一同は不快なトラウマとともに忘れることがないでしょう。こうしたことが大学の評判にどのような影響を与えるのでしょうか。良識ある当会会員は、愛校心という名のプレーキで口をつぐむかもしれませんが、世間にはおのずと風評が流れ出ると思います。私たちも昨年来、保存運動の会員をつのる過程で、表面では美しい言葉を並べつつ、もはや大学を支持しない、関係ない、という同窓生が意外に多く潜在することを知りました。冷ややかに「維持協力会にお金を出さないから口もいっさい出さない」と。

過去を大切にしない大学に未来を育てることは至難の業だと思われれます。過去はただ理念や抽象的な言葉だけではなく、具体的なモノや建物、さらには環境を覆う空気で伝わる部分が大きいことを歴史は教えています。90年近い風雪が贈った「古び」の美しさを惜しげもなく消し去り、最も核心的な建物を平然と破壊したのです。緑深い景観の消失を機に、母校の変質をおそれる同窓生が多くいることを、どうぞお考えください。

2007年9月15日

東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会
代表 藤原 房子
会員 一同